

私の国際交流体験

東京都 東京中華学校 3年 高 月明

「中国の方ですか」

私の名に目を留めると、彼らは一様にしてそう尋ねる。またか、と思いながらおそるおそる頷くと、それまでの慇懃な態度は一転、彼らはある種の悪意に満ちた、あるいは侮蔑を含んだ眼差しで私を見据えるのだ。

私が自身を中国人であると認識したのは、小学校に上がってすぐの頃だった。両親と日本語で会話し、また自身も日本で生まれ育ったために、自身が日本人であると信じて疑わなかった。それ故、中国人であると両親に知らされたとき、私は驚きとともに、その事実に対して、言い様のない嫌悪感を抱いた。日本人として過ごしてきた私にとって、マスコミや周囲の影響から、中国人は忌むべき存在であったのだ。大好きな日本に仇なす国、そういう認識だった。

それから、私は卑屈になっていった。私に通っているのはいわばインターナショナルスクールで、生徒のほとんどがどこかの国との混血である。「外国人」が当たり前の学校だ。当然のことながら私と同じ、中国人も多くいる。しかし、そこで私が臆することなく、伸び伸びと過ごせたかというところでもない。なぜなら彼らのほとんどは日本との混血。また日本で生まれ育ったのだ。私のような純血と違い、彼らには半分、日本の血が流れている。国籍もほとんどが日本なのだ。自身を中国人としてしか主張できない私と違い、彼らは堂々と日本人であると主張できる。実際多くが「私は

中国人なんかじゃない」という意見の持ち主だった。私はそれがとてつもなく羨ましく、また同時に妬ましかった。気に食わなかった。私だつて好きで中国人として生まれた訳ではない。こんな身分、捨てられるのなら捨ててしまいたいのに。教室で国の話が始めると、私はいつも両手で耳を塞いでいた。

中学になり、他の生徒のアイデンティティーがより確立され始めた頃、私の中国嫌いは益々強まった。中国人であるだけで塾では陰口を叩かれ、学校では私とは違った「中国嫌い」の同士が集まって昼休みに悪口大会が始まる。また同じ頃、唯一共感できるはずの中国人である両親までもが、何の因果か中国を小馬鹿にしだし、私に逃げ場がなくなっていた。当時の私にとって自分の国籍は最大の汚点で、認めがたいものだった。日本で生まれ、日本で育ち、日本語で話し、日本文化を有する。もしも私が日本人だったなら、こんなに悩むこともなかっただろうに。どうして中国人として生まれてしまったのだろう。そういうった思いが、私に中国を否定させた。

しかし時が経ち、私は初めて中国に行くことになった。そこで出会った父方のいとこが、私の中国に対するイメージを一変させた。彼は、実に「できた」人だった。非常に頭の回転が速く、それでいて朗らかで親切だった。私が中国に良い印象を持っていないと分かった上で、私を煙たがらず、真面目に話を聞いてくれた。中国人なんてどうせ、と自分を柵に上げて疎ましく思っていたことが、途端に恥ずかしくなった。私は他の皆と同様、彼らを個人として見ていなかったのである。「中国人」なんてただのレッテルの一つでしかなかったのに。

そこまで思いが至った瞬間、それならば、と思った。それならば、「私」が尊敬に値する人間になる。中国人なのに、と思われようが己を磨いて黙らせよう。それは少し後ろ向きな肯定ではあったが、高校一年生にして、ようやく私は自身が中国人であると受け入れたのである。

それ以降、私は少しずつ、自身の人間性を高めていった。私が成熟し、人に認められれば、きっとそれに付随する中国人という要素も、多少は見直されるかもしれない。そうでなくとも、「中国人」として没個人化され、私自身が無視されることはないだろう。そう思つての行動だった。

それが功を奏したのか、いつしか私はクラスメートから一個人として認められ、国籍にこだわらない付き合いができるようになった。時々国同士の仲が悪くなつてしまつたときでも、彼らは変わらない態度で接してくれるようになった。

当然、そうでない人もいる。むしろそうでない人の方が圧倒的に多いだろう。だからこそ私は自身を磨き、そんな視線に屈しないよう努力し続けなければならない。確かに国ごとの違いはある。これは否定できない事実だ。しかし国というのはあくまでも、自分を構成するものたつた一つに過ぎない。どこそこの国だからこうあるはずだ、という古い価値観を脱ぎ捨て、国や地域にとらわれない広い視野が持てるよう、私は自身を発信させていきたい。

